

# 「みどり」高まる関心

## 県内中高年から対象講座や勉強会

みどりをテーマにした市民公開講座や学習会が県内各地で開かれている。団塊世代の高齢化などで年間死亡者数が急増する「多死時代」の到来を控え、みどり方やみとられ方への関心の高まりが背景にあるようだ。介護職や看護師ら専門職も認知症高齢者やがん患者らの終末期ケアの研修を重ね、スキルアップを図っている。

1月下旬、松山市内であった講演会「在宅介護はどこまで可能か」。市民団体のウエルエイジングクラブまつやまが「人生の最終章をどう生きるのかを考えるきっかけに」と企画し、中高年を中心に約50人が参加した。

### メディカル

### えひ

講師は在宅医療専門のたんぽぽクリニック（松山市）を運営する医療法人ゆづの森理事長の永井康徳医師。約450人の在宅患者を支えており、「在宅医療で一番気を付けているのは本人や家族の不安を取り除くこと」と説明した。

日本では年間死亡者125万人（2012年）の8割近くが病院

# 終末期の選択 今から 専門職もケア向上目指す

で亡くなり、自宅は約1割にすぎない現状がある。永井医師は「在宅介護の大変さはどこ

まで医療を持ち込むかで大きく変わる」とし、終末期になれば点滴や胃ろうなど過剰な延命治療をせず、自宅での自然なみどりの選択肢があることを紹介した。

終末期をどこで、どう迎えるのか。高齢者自身が元気なうちに考えるようになり、各地で勉強会が開かれている。出前講座を行う県在宅介護研修センター（松山市）には、公民館や高齢者サロンなどからの依頼が増加しているという。「平穏死」や「自然死」を扱ったベストセラー本の登場もあって、同センターの担当者は「一人一人がみどりを自分のこ

## 「平穏死」考える講演会 15、16日

「平穏死10の条件」などの著書がある長尾クリニック（兵庫県）の長尾和宏院長の講演会が15日に松山市と鬼北町で、16日には久万高原町で開かれる。がん患者や認知症高齢者が最期まで住み慣れた地域で過ごし、平穏死を迎えるための終末期ケアの在り方などを解説する。

松山市での講演は15日午後2時50分から同市一番町3丁目の松山市一全日空ホテルで開かれる。県在宅緩和ケア推進協議会主催の市民公開講座「がんとともに生きる」の一環で、講演に先立ち、午後1時から自宅でのみどりを経験した家族の体験発表やパネル討論がある。

と、家族のこととらえるようになった」と推察する。

専門職のみどり教育も進んでいる。特別養護老人ホームやグループホームなど介護施設が内部で勉強会を開いているほか、県老人福祉施設協議会なども職員施設対象に研修を実施している。

四国がんセンター（松山市）は2月下旬、県がん患者・家族支援推進事業の一環として、県内で終末期看護に携わる看護師対象の研修を開く。米国で開発された教育プログラムに基づく県内初の研修会で、担当の菊内由貴同センター患者・家族総合支援室長は「知識や技術を体系的に学ぶことで、質の高い終末期ケアの提供につながる」と期待している。

長尾院長は500人以上を在宅でみとってきた。終末期には過剰な延命治療はせず、一

松山市での講演は15日午後2時50分から同市一番町3丁目の松山市一全日空ホテルで開かれる。県在宅緩和ケア推進協議会主催の市民公開講座「がんとともに生きる」の一環で、講演に先立ち、午後1時から自宅でのみどりを経験した家族の体験発表やパネル討論がある。

講演はほかに、15日0。892（21）080